別府大学附属図書館リニューアル記念イベント「Opening New Doors Ⅱ ～The LIFE～」実施報告
－図書館イベントと図書館資料の活用方法－

佐　藤　晋　之

【要　　旨】
本稿は、別府大学附属図書館リニューアル記念イベント「Opening New Doors Ⅱ~The LIFE~」の実施報告である。本稿では、企画構想から実施までの経緯をまとめ、アンケート調査の結果を分析する。本企画は、地域を拠点に活動する音楽アーティストの演奏を記録し地域資料の一つとして活用した図書館における地域連携の事例である。この事例から、地域連携としての図書館イベントと図書館資料の活用方法とその可能性についても考察する。

【キーワード】
図書館　イベント　アーティスト　地域資料　地域連携

1．はじめに

別府大学附属図書館（以下、附属図書館）は、2021年３月に１階がLibrary Loungeとして、また、2022年３月に２階がActive Floor、３階がLearning Floorとしてリニューアルオープンした。附属図書館の大規模リニューアルは、大学創立以降初めてのことである。このリニューアルを記念して、2021年度に実施した「Opening New Doors」[1]に引き続き、2022年度に「Opening New Doors Ⅱ~The LIFE~」と題してコンサート企画を実施した。本稿は、「Opening New Doors Ⅱ~The LIFE~」の実施報告である。実施報告の前に、リニューアルされた附属図書館の概要を簡単に紹介する。

１階Library Loungeは、大学史の展示や学生生活に関わる資料展示といった企画展示を主として行い、アクティブな学修環境の提供に努めている。２階Active Floorは、学生や教職員ら（以下、利用者）が図書館資料を用いてディスカッションができるよう通常の閲覧テーブルよりも大きいサイズの作業台や検索機を配し、課題解決の場として機能するよう設計されている。また、絵本コーナーには、児童らに読み聞かせができるスペースも確保されている。３階Learning Floorは、利用者が図書館資料と向き合えるよう個人学習に特化した閲覧環境が整備されている。全フロアを通して、木材や植物が多く使われていることやファブリック素材の温かみのある椅子を設置するなど「親しみと過ごしやすさ」がコンセプトとなっている。

2021年に実施されたリニューアル記念イベント第一弾では、アクティブな学修環境を提供する取り組みの中で、これまで図書館に足を運ばなかった潜在的利用者にも来館してほしいという発想から「Opening New Doors」と題して様々なジャンルのアーティストを招いて音楽コンサートを開催した。今回のリニューアル記念イベント第二弾では、先述の実施報告を参考に、「Opening New DoorsⅡ~The LIFE~」と題して図書館資料を用いた朗読と音楽のコンサートを開催した。本稿では、企画開催までの流れや実際の運営、今後の課題をまとめる。最後に、地域連携としての図書館イベントと図書館資料の活用方法とその可能性について述べる。

2.「Opening New DoorsⅡ~The LIFE~」概要

ここでは、企画構想から施設・設備、広報・受付、実施までの経緯について説明する。

2.1. 企画構想

本企画の構想時期は、2022年６月頃だった。この時期は、2021年のように新型コロナウィルス感染症対策により集客を伴うイベントが制限されていた時期とは異なり、手指消毒や換気などの基本的な感染対策を施した上で多くの地域や組織において集客を伴うイベントが開催されていた。本企画は、新型コロナウィルス感染症対策の一環として、集客を伴う対面形式のみではなく、オンライン配信も採用してハイブリッド形式での開催とした。

新聞やテレビ等のメディアでは、新型コロナウィルス感染症のニュースと入れ替わるように、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースが連日報道されていた。本企画は、このような世界情勢の中で開催するため、「命」や「ふるさと」、「日々の生活」について考える機会を作ることが必要ではないかと考えた。そこで、サブタイトルを「The LIFE」とした。

内容は、前回のアンケート調査結果において朗読や読み聞かせ等の図書館資料を用いた企画を希望する声が多かったことや「The LIFE」の趣旨を来場者に分かりやすく伝えるため、メッセージをダイレクトに伝えられる朗読会を検討した。最終的には、作品の世界観をより分かりやすく表現するため、朗読と音楽のコンサート企画を開催することになった。

出演者の選定は、大分県を拠点に第一線で活動する者とした。朗読には来場者が聞き取りやすい声量や声質を持つアナウンサー、音楽には朗読に演奏を合わせるアドリブの技術があるアーティストを起用することとした。出演者情報の概要は後述する。なお、出演者の詳細については、別紙２チラシ裏面を参照されたい。

演目の選定は、「The LIFE」の趣旨に沿った内容の作品であること以外に、著作権フリーであることとした。本企画は、集客を伴うイベントである上に、オンライン上でライブ配信も予定していた。朗読作品の著作権について許諾を得るためには、対面とオンラインの両方の形式で煩雑な手続きと高額な使用料が必要になる。また、著作権の所有者への連絡手段も検討する必要がある。そのため、著作権フリーの青空文庫や許諾を得やすい大学関係者の著作から選定することとした。楽曲の著作権については、本企画のために書き下ろしたオリジナル楽曲と著作権の保護期間を満了したクラシックギター曲をアレンジした楽曲を準備するとのことで問題なかった。朗読作品の詳細については、別紙2チラシ裏面を参照されたい。

2.2. 企画の意義

別府大学附属図書館リニューアル記念イベント「Opening New DoorsⅡ~The LIFE~」は、「命」「ふるさと」「日々の生活」を総じて「The LIFE」をテーマとして、大分県を拠点に第一線で活

躍するアーティストを起用した朗読と音楽のコンサートである。

本企画のテーマ「The LIFE」は、新型コロナウィルス感染症やロシアによるウクライナ侵攻など混迷を深める世界情勢の中において、過去の図書館資料を見返しながら先人が歩んできた道に想いを馳せることで自分たちが置かれている状況を共に考えたいという趣旨である。本企画の趣旨は、様々なメディアから指導的で強烈なメッセージが次々に発信される中において、癒しや気付きを提供できるという点で意義があると考える。

大分県を拠点に活動するアーティストを起用することについては、地域連携の側面からだけ見ても意義があると考える。さらに、本企画の意義を挙げるとすれば、地域連携の成果物として新しいタイプの地域資料が生産できる点である。地元アーティストを起用した図書館イベントの事例や地元出身作家の図書を地域資料として活用している事例は、2019年に桜井市立図書館で行われた開館20周年記念ライブラリーコンサート「ピアノで歩む『森の道』コンサート」[2]や2020年に世田谷区立図書館で行われた「子どもから大人まで楽しめる図書館コンサート」[3]など数多く存在する。しかし、イベントを開催したり地域の作家の資料を紹介したりするだけでは、一過性の地域連携として忘れ去られてしまうのではないかと推察する。本企画の意義は、図書館イベントという「経験」を図書館資料として活用し、イベント終了後も利用者に同じ経験を提供できることである。また、一般的に著名な作家や過去の偉人の作品ではなく、著名ではなくとも現役で活動しており質の高い作品を個人で生産している地元アーティストを発掘し地域資料とすることは、今を生きている利用者と同じ時間軸や同じ目線で生産され続けていく資料であるため、図書館がそれらの資料を利用者に提供する限り、継続的な地域貢献となり得るのではないかと考える。永井[4]は、東日本大震災での経験を図書館資料として活用する事例を紹介している。これは、市販の図書や雑誌を始め、自治体の広報紙や学校で作成された文集、学協会で刊行した報告書、支援団体が発行したイベントのチラシなど様々な印刷媒体の資料の収集・公開の取組みについてである。永井が述べる経験を図書館資料とする取り組みは、様々な印刷媒体資料を通して当時の経験から得た教訓や想いを後世に残していくものである。本企画は、将来の利用者に対して当時と同じ経験を提供できる再現性の高い図書館資料の生産についての取り組みである点で異なる。

本企画の開催形式は、対面とオンライン配信によるハイブリッド形式とした。コロナ禍以降、各種イベントにおけるオンラインを用いたハイブリッド形式での開催は、ニューノーマルと言っても過言ではない形式となっている。ハイブリッド形式での開催は、感染症対策の観点からのみではなく、個々人が情報の入手経路を自由に選択できる情報環境であるため、情報の提供者はユーザーに対して情報の入手経路の選択の自由を提供するという点で意義がある。デジタルレファレンスなどのアウトリーチサービスを展開する図書館の事例は増えてきているため、これも一種のアウトリーチサービスと言える。このような背景から、オンライン配信では、リアルタイムで観賞できる「ライブ配信」とユーザーの都合の良いときに観賞できる「アーカイブ配信」の両方の形式で配信することとした。情報技術の革新によって、安価で容易にイベントを録画・録音し配信することができるようになったことで、先述した「経験」を図書館資料にすることが可能になったのである。

２.３. 施設・設備

本企画のメイン会場は、附属図書館1階Library Lounge[写真1]とした。当初、第二弾リニューアルは２階３階部分であるため、２階もしくは３階を会場とする案もあった。しかし、来場者の出入りを管理することが困難であることや階段での昇り降りによる密の発生を回避することを考

慮した。２階は、絵本コーナーがあるため、幼児や児童を連れた来場者向けにスクリーンを設置しパブリックビューイング会場[写真2] とした。

出演者の控室として、男性出演者用には附属図書館２階館長室を、女性出演者用には３階ワロンルームを用意した。ワロンルームには、姿見（筆者私物）を設置した。後述するが、豊後高田市立図書館マスコット「花こづち」も急遽出演することになり１階事務室を待機場所として用意した。

舞台は、附属図書館中央の丸柱の死角にならないことやコンセントを確保できること、備え付けのスポットライトを当てられる場所であることを考慮して附属図書館奥に設営した。客席は、丸柱を避けて観賞できることやソファ席を活用すること、来場者の出入りのしやすさ、出演者の入退場のための動線確保を考慮した結果、50席を設営した。

照明は、作品に適した幻想的な世界観を演出するため、白色蛍光灯を消灯し、日暮れと共にスポットライトがガラスに反射するようスポットライトのみを使用した。

撮影・録音機材は、記録用とライブ配信用を用意した。どちらの機材も客席から死角となる丸柱にセッティングすることで鑑賞の妨げにならないよう注意を払った。

写真1. メイン会場

写真2. パブリックビューイング会場

２.４. 広報

広報の主な手段と内容を表１に示す。昨年度の広報では、新型コロナウィルス感染症の影響を重視していたため、大学関係者を主な対象として活動した。本企画の広報では、メイン会場とパブリックビューイング会場、本格的なライブ配信を準備することで万全の感染症対策の下、一般の方に多く来場してもらうことに注力した。

チラシは、昨年度の来場者の属性を見ると、地域の高齢者や家族連れが多く来場していたため、地域の口コミ効果を期待して前回よりも300部多い600部印刷した。在学生や教職員に向けての広報は、チラシの学内貼付や授業内告知の他に、附属図書館1階Library Loungeにて朗読作品の展示を行った。継続的な情報発信としては、ホームページ（HP）やSNSなどのデジタルな手段を用いた。また、より多くの方々に情報を認知してもらうため、新聞やラジオといったマスメディアへの情報提供を積極的に行った。

広報の結果、出演者をはじめとした多くの関係者の尽力により各所で話題となるほどだった。特に、海原みどり氏のご尽力によりラジオでの告知機会を得たことは効果的だった。

表１. 広報の主な手段と内容

№.	手　　段	内　　容	担　　当
1	チラシ	A4/両面印刷/600部/学内８ヶ所貼付、出演者及び関係者による配布及び貼付。	佐藤（筆者）作成
2	附属図書館HP	「お知らせ」に情報掲載。	附属図書館
3	附属図書館Instagram	告知など計２回更新。	附属図書館
4	展示	附属図書館にて朗読作品の展示。	附属図書館
5	司書講習Instagram	リハーサル風景や告知など計２回更新。	司書講習事務
6	大学ホームページ	「イベント開催情報」に情報掲載。	大学広報室
7	プレスリリース	主要メディアに向けた情報提供。	大学広報室
8	ラジオ	OBSラジオ「情熱ライブ！Voice」11/17放送回出演(約20分間)。	佐藤（筆者）
9	新聞	今日新聞11/29朝刊 情報掲載。 大分合同新聞12/1朝刊 情報掲載。	附属図書館 佐藤（筆者）
10	出演者SNS	全出演者（５名）のInstagramやFacebookにて継続的な情報発信。	
11	佐藤（筆者）SNS	Instagram計３回更新。Facebook計２回更新。本学在学生及び卒業生、司書講習修了生への情報発信。	佐藤（筆者）

２.５. 実施

ここでは、企画当日の流れを示す。当日のタイムテーブルは表２の通りである。

出演者情報の概要を以下に示す。オープニングアクトは、第一弾でもパフォーマンスを披露したウクレレデュオKumiko & Kaiである。なお､同日午後に開催された司書課程進路支援企画「司書のしごと」に招聘した豊後高田市立図書館マスコットキャラクター「花こづち」にオープニングアクトへの出演を打診したところ急遽出演が決定したことをここに記しておく。

朗読は、元OBS大分放送アナウンサー･現フリーアナウンサーの海原みどり氏である。音楽は、本企画でアーティスト選定を担当したクラシックギタリストの溝口伸一氏と作曲及び編曲兼キーボードの都留敬比公氏である。出演者の詳細は、別紙２チラシ裏面を参照されたい。

リハーサル回数は、開催当日を入れて３回だった。１回目は佐藤（筆者）宅にて10月30日(日)に、２回目は附属図書館１階Library Loungeにて11月25日(金)に行われた。

ライブ配信は、ミラーレス一眼カメラ１台と集音マイク１台をセッティングした。アーカイブ配信は、コンパクトデジタルカメラ１台、ビデオカメラ１台、360°カメラ１台をセッティングした。配信は､無料動画配信サービスYouTube[5]を介して行った。写真撮影は､附属図書館スタッフ２名と大学広報に依頼した。

受付では、手指消毒及び検温、緊急連絡先の記入を呼び掛けた。また、来場者アンケート用紙を配布した。幼児・児童を連れた来場者には、２階パブリックビューイング会場を案内した。

表２. 当日のタイムテーブル

時　間	内　　容	備　　考
14:00	出演者集合	女性出演者控室：附属図書館３階ワロンルーム 男性出演者控室：附属図書館２階館長室
14:00- 16:00	舞台設営リハーサル	オープニングアクトと本番のセッティングを確認 動線の確保、立ち位置・カメラ位置・照明の確認、ライブ配信テスト
16:15	開場	受付にて手指消毒と検温、緊急連絡先の記入 オープニングアクトスタンバイ
16:30	開演	佐藤（司会）挨拶・館長挨拶代読 オープニングアクト出演者紹介
16:35- 16:55	オープニングアクト	Kumiko & Kai、花こづち
17:00- 18:00	本番	出演者紹介（海原、都留、溝口） 「つののないおに」作者フリートーク
18:00- 18:05	閉演	佐藤（司会）挨拶アンケート記入依頼。

＊本番で使用したタイムテーブルのため敬称略

３．開催記録

開催記録として、開催日程と来場者の概要及び開催の様子、アンケート調査結果を以下に示す。

３.１. 開催日程と来場者

「Opening New Doors Ⅱ ~The LIFE~」は、2022年12月３日(土)16時半に開演した。来場者は、家族連れ等の場合は代表者をカウントしたため約40名で、パブリックビューイング会場を利用した来場者は２組の親子だった。ライブ配信の視聴者数は、17名だった。アーカイブ配信再生回数は、324回（2023年1月22日現在）だった。

３.２. 開催の様子

本企画は、ほぼタイムテーブル通りに進行した。写真３は司会者（筆者佐藤)、写真４はウクレレデュオKumiko ＆ Kaiの演奏でフラダンスを踊る花こづち、写真５は日が暮れ始め幻想的な雰囲気のメイン会場、写真６は都留敬比公氏、写真７は海原みどり氏、写真８は溝口伸一氏、写真９は「つののないおに」の作者であるしゅんのすけ氏とのフリートーク、写真10は満席のメイン会場、それぞれの様子である。

写真3. 司会者(筆者・佐藤)

写真4. Kumiko & Kaiと踊る花こづち

写真5. 幻想的なメイン会場

写真6. 都留 敬比公 氏

写真7. 海原 みどり 氏

写真8. 溝口 伸一 氏

写真9. しゅんのすけ氏とのトーク

写真10. 満席のメイン会場

3.3. アンケート調査の概要と結果

アンケート調査は、来場者約40名とオンライン視聴者を対象にアンケート用紙及びアンケートを作成・分析できる無料サービスGoogle Formsを利用して実施した。回答数は、アンケート用紙での回答が22名、Google Formsでの回答が21名（2023年１月22日現在）の計43名だった。

アンケート項目は、１）属性、２）別府大学附属図書館の利用経験の有無、３）コンサートを知ったきっかけ、４）コンサートに来場（視聴）した動機、５）コンサートの満足度（５段階）、６）意見・要望・感想等の自由記述の全６項目を設定した。以下に、前年度の結果と共に示す。

コンサートの来場者の属性を表３に示す。一般の来場者が43名中25名（58.1%）と最も多かった。次に、学生14名（32.6%）、教職員４名（9.3%）という結果になった。前年度と比較すると、一般の来場者数の割合はほぼ同程度であるが、学生の来場者数の割合が大幅に増加した。一方で、教職員の来場者数が減少した。

表３. コンサート来場者の属性

	今年度(n=43)		前年度(n=61)	
	人　数	割　合	人　数	割　合
学　生	14	32.6	5	8.2
教職員	4	9.3	8	13.1
一　般	25	58.1	36	59.0
無回答	0	0.0	12	19.7

附属図書館の利用経験の有無を表４に示す。今年度の来場者は、19名（44.2%）は利用経験があり、24名（55.8%）は利用経験がないという結果となった。前年度と比較すると、これまで附属図書館の利用経験がない来場者が9.9ポイント増加した。

表４. 附属図書館の利用経験の有無

	今年度(n=43)		前年度(n=61)	
	人　数	割　合	人　数	割　合
有	19	44.2	28	45.9
無	24	55.8	28	45.9
無回答	0	0.0	5	8.2

コンサートを知ったきっかけを表５に示す。家族・友人・知人からの口コミが15名（34.9%）と最も多かった。次いで、授業内での告知が12名（27.9%）となった。また、SNSが０名という結果だった。前年度と比較すると、授業内での告知が23.0ポイント増加しており、チラシが14.2ポイント、SNSが8.2ポイント減少した。

表５. コンサートを知ったきっかけ

	今年度(n=43)		前年度(n=61)	
	人　数	割　合	人　数	割　合
大学HP	1	2.3	2	3.3
授業内での告知	12	27.9	3	4.9
ＳＮＳ	0	0.0	5	8.2
家族・友人・知人	15	34.9	30	49.2
チラシ	8	18.6	20	32.8
その他	5	11.6	9	14.8
無回答	2	4.7	0	0.0

コンサートに来場（視聴）した動機を表６に示す。最も多かった動機は、前年度同様で出演者の演奏に興味があったという結果で21名（48.8%）だった。次いで、図書館に興味があったが16名（37.2%）だった。音楽に興味があった人は､前年度から40.6ポイント減少の８名（18.6%）だった。「その他」の３名は、朗読を聞きに来たという動機だった。

表６. コンサート来場（視聴）動機（複数回答可）

	今年度(n=43)		前年度(n=61)	
	人　数	割　合	人　数	割　合
出演者の演奏に興味があった	21	48.8	31	50.8
音楽に興味があった	8	18.6	30	49.2
図書館に興味があった	16	37.2	12	19.7
なんとなく興味があった	7	16.3	9	14.8
その他	3	7.0	3	4.9
無回答	0	0.0	0	0.0

コンサートの満足度を表７に示す。コンサートの満足度を見ると、「非常に満足」が21名（48.8%）と「満足」が13名（30.2%）で８割の来場者が満足した結果となり、概ね好評だったことが分かる。しかしながら、前年度と比較すると、「非常に満足」と「満足」を合わせた結果が11.8ポイント減少した。

表７. コンサート満足度

	今年度(n=43)		前年度(n=61)	
	人　数	割　合	人　数	割　合
非常に満足	21	48.8	40	65.6
満足	13	30.2	16	26.2
普通	1	2.3	1	1.6
不満	8	18.6	0	0.0
無回答	0	0.0	4	6.6

最後の質問項目は、意見・感想・要望等の自由記述である。以下に、主な意見から一部抜粋して箇条書きで示す。

①オープニングアクトの演奏はとても感動して泣きそうになりました。(後略)
②朗読と音楽のコラボレーションは新鮮でした。 朗読だけだと飽きてくることがあったのですが、音楽が入ることでストーリーが明確になるというか分かりやすくなりました。
③音楽がつくと更に雰囲気が盛りあがって感動が大きい！！有難うございました！！
④絵本の朗読も素晴らしくて、見入ってしまいました。私もあのような朗読をしてみたいと思いました。絵本の朗読やコンサートも見て贅沢な時間でした。
⑤本の世界感をより具体的に感じることができました。朗読だけでなくて、音楽との融合だったので視覚よりも聴覚、嗅覚から映像で頭に流れてくるような感覚になりました。
⑥洗練された世界観を表現できるアーティストの方が地方にいることが驚きでした。
⑦情景を想像しながら聞いていると、とても迫力があるように感じましたし、自分ひとりで絵本を読むのとはまた違った楽しさがありました。
⑧本と音楽が合わさると目に見えないミュージカルのようでとても楽しかった。絵本の絵を想像して聞けるので本の新しい楽しみ方を知れた。
⑨大変失礼ながら、別府大学という大学があることを今回初めて知りました。(中略) 一気に別府大学のファンになりました！ 一般的な大学の固いイメージではなく、メッセージを分かりやすく、親しみを持って伝えようとする姿勢に感激しました。(後略)
⑩別府大学ってこんなにオシャレになってたんですね…驚愕です！ 音楽番組を見ているような動画で驚きました。
⑪このような企画を図書館で実践されている事例を私は知りません。(中略) 地元の人間として誇れる大学があることは大変うれしい限りです。
⑫（前略）20年以上前に仕事で別府大学に訪れたことがあります。 コンサートを見て時代が変わったんだと思いました。 しかし、変わらないもの、変わってはいけないものをしっかりと受け継いでいる空気を感じました。
⑬正門に入った時から駐車場の案内、入り口までの案内ととても助かりました。
⑭司会の先生のアットホームでリラックスした雰囲気に癒された。
⑮季節､季節のコンサートができるといいと思います。(クリスマス､夏はハワイアン､エイサー…)
⑯（前略）日本の古楽も如何でしょうか？
⑰朗読会ですが、市民参加型で行うのも楽しいと思います。年齢問わず、絵本を読みたい人をつのって音楽もつけると子育て世代も参加しやすいと思います。
⑱若い人たちに昔の作品の良さを伝える方法としてシリーズ化を希望します！
⑲佐藤義詮先生の詩を紹介される試みは今後も続けていって欲しいと思います。(後略)

⑳落語

３.４. アンケート調査結果の考察

コンサート来場者の属性（表３）を見ると、最も多かった層は一般で、次いで学生となっていた。昨年度同様、一般の来場者が多かったことから、地域の方々に求められている企画だと考えられる。学生の割合については、昨年度の8.2%から32.6%と24.4ポイントも大幅に増加している。これについては、学内外での広報活動の成果だと考えられる。

附属図書館の利用経験の有無（表４）を見ると、これまで附属図書館を利用したことがない来場者が前年度比で9.9ポイント増加していた。これはコロナ禍により附属図書館への学外者の来館を制限しているためということも考えられる。しかし、多くの潜在的利用者に対して図書館の魅力を伝えられたことは大きな収穫の一つであると言える。

コンサートを知ったきっかけ（表５）を見ると、家族・友人・知人からの口コミが最も多く、次いで授業内告知だった。これは、特定のコミュニティに対して影響力のある特定の人物に情報が伝わることで大きな宣伝効果を得られることが考えられる。SNS上で言うところのインフルエンサーのような働きをしている人物がオフライン上にも存在すると言える。そのため、オフライン上のインフルエンサーを特定して積極的に情報提供をすることで広報活動の労力の省力化を図ることができると考えられる。

コンサートに来場（視聴）した動機（表６）を見ると、最も多かった層は前年度同様で出演者に興味があったという結果だった。音楽に興味があったと答えた人が減少した理由は、主となる企画内容が朗読であったためだと考えられる。注目すべきは、図書館に興味があったと答えた人が16名（37.2%）と前年度よりも17.5ポイント増加している点である。これは、附属図書館のリニューアルに対して興味を持ってもらえていると捉えることができる。

コンサートの満足度（表７）を見ると、「満足」「非常に満足」と答えた人が８割であり、前年度同様に好評だったことが分かる。しかし、前年度比で11.8ポイント減少しており、かつ、「不満」と答えた人が８名（18.6%）と気になる値となった。来場者からのコメントを見る限りネガティブなコメントは見当たらなかったため、精査するための情報が足りない。次回以降の調査では、質的な項目を追加するなどアンケートの調査項目を再検討する必要があると考える。

自由記述については、ポジティブなコメントのみであり、ネガティブなコメントは見当たらなかった。以下では、コメントを内容によって分類しながら考察する。

①②③④⑤のコメントには「感動した」や「新鮮だった」、「見入ってしまった」、「本の世界観をより具体的に感じることができた」とあり、朗読と音楽のコラボレーションの相性が良かったことが分かる。

⑥⑦⑧のコメントには、「洗練された世界観を表現できるアーティストが地方にいるのかと驚きだった」や「自分ひとりで絵本を読むのとはまた違った楽しさがあった」、「本の新しい楽しみ方を知れた」とあり、本企画のタイトルでもある「Opening New Doors」にふさわしい新しい気づきを与えることができたと言える。

⑨⑩⑪⑫のコメントには、「別府大学という大学を初めて知った。一気に大学のファンになった。」や「別府大学はこんなにオシャレになってたんですね」、「地元の人間として誇れる大学がある」、「コンサートを見て時代が変わったと思った。しかし、(別府大学としての)変わらないもの、変わってはいけないものをしっかりと受け継いでいる空気を感じた」とあり、本企画を通じて別府大学全体の印象をより良い方向へと導くことができた。

⑬⑭のコメントには、「駐車場の案内、入口までの案内ととても助かった」や「司会のアットホー

ムでリラックスした雰囲気に癒された」とあり、来場者に寄り添った対応・接遇ができていたと言える。

⑮⑯⑰⑱⑲は、今後の企画に対する要望である。「シリーズ化を希望」や「佐藤義詮先生の詩を紹介する試みは続けてほしい」といったコメントがあり、今後も企画継続を望む声があった。また、「季節、季節のコンサート」や「市民参加型」という要望については、今後の企画案として検討したい内容である。他にも「古楽」や「落語」といった他ジャンルの企画開催への要望があり、来場者の知的好奇心を喚起できたものと考えられる。

４．おわりに

本企画は、別府大学附属図書館のリニューアル第二弾を記念して実施されたものである。本企画を通して、在学生や教職員、一般の方々など多くの利用者と共に図書館イベントの魅力や図書館資料の可能性について考える機会となった。

本企画の趣旨は、様々なメディアから指導的で強烈なメッセージが発信される中において癒しや気付きを得られるような機会とすることや大分県を拠点に活動するアーティストらと協働して地域連携につなげること、また、その「経験」を図書館資料にすることである。来場者や視聴者からのコメントを見ると、本企画の趣旨である癒しや気付きを提供できたことが分かる。また、大分県を拠点に活動するアーティストらを招聘することも実現した。そして、アーカイブ配信は繰り返し再生され、図書館資料として機能していることが分かる。

これからの図書館イベントは、その場に参加した者だけではなく、異なる時間、異なる場所においても経験を共有できる再現性の高い図書館資料として記録されるべきだと考える。また、地域の中で運営される公共施設だからこそ、地域を拠点に活動する様々なコンテンツのクリエイターやアーティストを発掘し、地域の魅力を伝える使命がある。本企画を通して、図書館における地域で活動するアーティストとの地域連携の一つの事例を示すことができた。以上で、附属図書館リニューアル記念イベント「Opening New Doors」は完結とする。

今後の課題は、これからも本企画で実施した取り組みを継続し、様々な利用者から必要とされる図書館資料のコレクションを形成することである。また、今回は動画コンテンツだったが、オーディオブックのようにもっと気軽に利用できるコンテンツについても検討したい。これらについては、継続的に調査分析を行う。

謝　　辞

本企画は、令和４年度学長裁量経費において附属図書館リニューアル記念事業として採択され実施したものです。本稿は、筆者が別府大学附属図書館リニューアル記念イベント「Opening New Doors Ⅱ ~The LIFE~」の実施報告としてまとめたものです。

附属図書館長浅野則子先生には本企画実施及び本稿執筆の機会を与えて戴きました。ここに深謝の意を表します。並びに、クラシックギタリスト溝口伸一氏にはアーティスト選定をはじめ本企画実現に向けて多大なるご尽力を戴きました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

[1] 佐藤晋之. “別府大学附属図書館リニューアル記念イベント「Opening New Doors」実施報告―図書館イベン

トの重要性と図書館資料の範疇―”. 別府大学紀要論文. 63号, 2022, p.145-157
[2] 桜井市立図書館. “桜井市立図書館開館20周年記念ライブラリーコンサート”. TRC図書館流通センターホームページ. https://www.trc.co.jp/topics/event/e_sakuraishi_13.html, (参照: 2022-02-01)
[3] 世田谷区立図書館. “子どもから大人まで楽しめる図書館コンサートを開催しました”. 世田谷区立図書館ホームページ. 2020-11-12. https://libweb.city.setagaya.tokyo.jp/main/0000003913/article.html, (参照: 2022-02-01)
[4] 永井伸. “図書館共同キャンペーン「震災記録を図書館に」呼びかけ団体における東日本大震災関連資料収集の現状と課題－震災の経験を活かすために－”. カレントアウェアネス. no.319, 2014. https://current.ndl.go.jp/ca1815, (参照: 2023-01-23)
[5] Shinji, Sato. “別府大学附属図書館リニューアル記念コンサート「Opening New DoorsⅡ~The LIFE~」”online video, YouTube. 2022-01-22, https://youtu.be/kyLAK-XbQxA, (参照: 2023-01-23)

別紙１　チラシ表面

別府大学附属図書館リニューアル第２弾を記念して

「あの大好評企画」が帰ってきます。

新たな出演者を迎えて、より魅力的に、より分かりやすく、

別府大学附属図書館の世界観をお届けします。

今年のテーマは「命」。

「朗読と音楽」と共に今ここに生活していることを皆さんと一緒に考えます。

お一人でもご家族でもお楽しみいただける企画です。

図書館での時間をゆっくりとお過ごしください。

別府大学附属図書館 1F Library Lounge

2022 年 12 月 3 日(sat) 16:30 開演 16:15 開場

YouTube にてライブ配信もお楽しみいただけます

ライブ配信に関する最新情報は、別府大学附属図書館公式 Twitter または Instagram をご確認ください。

お問い合わせ先：別府大学附属図書館 ℡: 0977-66-9633 mail: library@beppu-u.ac.jp

入場無料 ＊手指消毒やソーシャルディスタンス等感染予防対策にご協力ください。

＊新型コロナウィルス感染症の状況によりオンラインのみでの開催になる可能性があります。

別紙２　チラシ裏面

Opening New Doors II ~The LIFE~ 出演者

海原 みどり Midori Kaibara

OBS 大分放送に入社後、アナウンサーとして長年にわたりテレビやラジオで数々の番組を担当。主な担当番組は、【テレビ】:TBS「ザ・ベストテン」追っかけウーマン、TBS「朝のホットライン」リポーター、RKB 発九州ネット「九州が知りたい」「生ワイド九州」リポーター、「サンデー大分」「サンサン大分」等の大分県・大分市広報番組のリポーター。「OBSニュースライン」キャスター、「映像の軌跡」「おおいた経済ナビ」ナビゲーター。「日本のチカラ」「窓をあけて九州」「九州遺産」等の全国・九州ネットのドキュメンタリー番組ナレーション等多数。【ラジオ】:「歌の花かご」「歌のない歌謡曲」等の歌番組、「大分モーニングエコー」「ごごらくワイド」「情熱ライブ ボイス」等の生ワイド番組パーソナリティ、「私の作文」「えんぴつの詩」「OBS おはなしワールド」朗読番組などを担当。一方、「アジアの達人」「アジアの学校」オトナ女子塾」等、自身で企画プロデュースしてトークする番組も多数制作。2002年 系列局のアナウンサーで競う<アノンシスト賞全国審査テレビ・読みナレーション部門>で全国最優秀賞を受賞。 温かく信頼性がある読みには、定評がある。現在は、フリーアナウンサーとして司会やナレーション、アナウンス指導などの活動を行う。大分合同新聞文化教室朗読講座講師。

都留 敬比公　Toshihiko Tsuru

九州大学在学中の 1981 年に博多のバンド『ニックニューサ』のキーボードとしてデビュー●86 年ヤマハ POPCON 九州大会のアレンジャーとしてつま恋本選会に参加●91 年福岡市ベイサイドプレイス『音と水と光のショー』の音楽等、福岡市を中心に活動●94 年より大分県を活動の拠点とし、OBS テレビ『旬感！3ch』のテーマ、TOS テレビ『ゆ～わくワイド』のテーマ、富来小学校校歌、ミュージカル劇団の作曲などを担当●演奏活動はジャズ、ポップス、ロックとジャンルを問わず幅広く行っており●作・編曲家としても映画音楽や数多くの音楽作品を制作するほか●マニアックな楽譜のダウンロード配信や自宅を拠点に音楽＆コンピュータ教室も展開している。

溝口 伸一　Shin-ichi Mizoguchi

11 歳よりギターを竹内幸一、竹内竜次の各氏に師事。兵庫県のギタリスト故・稲垣稔氏に師事。
音楽理論・ソルフェージュを加藤宏子氏に師事。
2009 年第 37 回山口ギターコンクール優勝。
2011 年第 57 回九州ギター音楽コンクール 首席。
2013 年第 40 回日本ギターコンクール 審査員特別賞。
大分県芸術文化スポーツ振興財団主催、アウトリーチプログラム登録アーティスト。
溝口ギター教室を主宰、指導にもあたっている。九州ギター音楽協会公認講師。別府市在住。

オープニングアクト

Kumiko & Kai（特別出演）

大分県を拠点とし、ハワイアンを中心に音楽活動をしている Duo。スラックキーギターとウクレレの KAI、ボーカルとウクレレの KUMIKO で構成されている。聴いてくださる方々が笑顔になれるような演奏を心がけています。

Program

O.A.いのちのおゆ 1.四季の連絡船/砂塔美晶（別府大学創設者佐藤義詮） 2.つののないおに/遠藤悠，しゅんのすけ
3.野ばら/小川未明 4.ピアノ/芥川龍之介 5.マッチ売りの少女/ハンス・アンデルセン著，大久保ゆう訳 6.永訣の朝/宮沢賢治